

平成 28 年度 自己点検・自己評価表

大阪成蹊短期大学附属こみち幼稚園

1. 本学の建学の精神

“桃李不言下自成蹊” とうりものいわざれどしたおのずからこみちをなす

「成蹊」の名称は、中国の司馬遷の『史記』に由来しています。「桃や李^{すもも}は何も言わないが、その美しい花や実^みにひかれて人が集まってくるので木の下には自然と小道（蹊）ができる」という意味です。

徳が高く、尊敬される人物のもとには徳を慕って人々が集まってくるというたとえです。

2. 本園の教育目標

強く 明るく 考える子ども

3歳児 喜んで 幼稚園へ来る子ども

4歳児 友だちと なかよく遊べる子ども

5歳児 力いっぱい 遊びやしごとをする子ども

3. 今年度重点的に取り組む目標

○幼稚園教育の基本は環境を通して行う教育であるということを踏まえ、日々の教育活動においては、「幼児期に相応しい生活を展開する」、「遊びを通して総合的な指導を行う」、「幼児一人一人の発達^{たつと}の特性に応じた指導を工夫する」ことを重視していく。また教員がそれぞれの持ち味を生かして、幼児の実態を把握しながら幼児と共に生活を創り出す保育実践に努める。

○教職員は幼児がのびのびと思う存分に遊べる安全で豊かな環境を構成し、思ったことや考えたことを心ゆくまでやることができる生活(時間・場など)を保障していきたいと考えている。更には、一人一人の幼児がもっている個性や発達^{たつと}の特性を見極め、その幼児に合った指導を行うことを大切にすると共に、幼児が自分らしく、生き生きとして日々を過ごし、自己充実できる環境づくりと適切な指導方法を工夫していきたい。

○園内研修を年間通じて計画し、研修テーマの視点から実践報告について教員間で協議を深め、各々の実践を振り返り、改善点や改善の方法について考える機会をもつ。

○大学・短大との協力体制を強めると共に、関係諸機関との連携を密にしながら、各々の専門性を保育に取り入れ、幼児・保護者・教員の豊かな学びに繋げていきたい。

4. 評価項目の達成及び取り組み状況

(評価結果はABCの3段階評価としています)

評価項目		結果	取り組み状況
I	○教育活動 ・学園の建学の精神や、園の教育目標を踏まえ、幼児期に相応しい、質の高い保育の実践に努める。	A	重点としてきたこと 各年齢の発達を理解し、意図的且つ計画的に構成された保育環境の中で、幼児が主体的に活動し、発達に必要な経験を積み重ねていく保育の在り方を考えてきた。表面的な幼児の姿や、見栄えや出来栄に囚われることなく、幼児が活動に取り組んでいく経過を大切にし、活動の過程の中にある気付きや学びなどを見取っていくことに重点をおいた。 今後の課題 教員が視野を広げ、多様な保育の在り方を知る機会を持つことの難しさを感じている。自園の中に留まるのではなく、研修会などの機会を有効に活用する方法を考えていかなければならない。また、各々が自分の保

	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の幼児の発達や育ちの姿を的確に読み取り、一人一人に寄り添った関わりや環境構成を考える。 		<p>育課題を意識し、参考文献から学んだり、主体的に研修に出向いたりするなど、意識向上も必要であると感じる。</p> <p>取り組んできたこと 日々の保育を振り返り、幼児の姿を適切に読み取ること、保育者自身の関わりを見直すことを大切にしていっていった。場合によっては、個々の様子を教員で共有し、多様な視点から幼児を見取ることができる機会をつくった。</p> <p>今後の課題 幼児の発達については、3・4・5歳児各年齢の育ちを知ると共に、3～5・6歳への流れを把握することも勉強していく必要がある。さらに幼児の姿から読み取ったことを踏まえて、次の保育を構想するところまで繋いでいく力をつけることが、これからの目標である。</p>
II	<p>○教員研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践を通して、教員一人一人が自らの保育を見直し、再構築することに重点を置いた園内研修の取り組みを進める。 	B	<p>取り組んできたこと 研究テーマ「遊び込める子供～幼児が遊び込む要因の検証～」をテーマに年間通じて10回の園内研修を実施した。実践をビデオ撮影し、実際の幼児の動きや呟きを見聞きしながら教員間で意見交換をし、自らの保育を振り返り改善点を見出すことができた。また、研修テーマを意識しながら日々の実践に取り組み、研鑽を重ねていくことができた。</p> <p>今後の課題 幼児が遊び込むための要因として見出したことをもとに、環境構成・必要な教師の関わり、について考え、実践を進めていっていった。前年度に見出した、幼児が遊び込む要因となるものの確かめができた。本テーマに基づいての園内研修を今年度で一区切りとし、3年間の研修を整理しまとめていく計画である。</p>
III	<p>○学園や様々な諸機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大阪成蹊大学、短期大学との連携を強め、学生・教員と協力体制をつくる。 ・井高野地域の学校、及び地域の関係諸機関と連携し、幼児の生活が広がり、豊かな経験ができるよう交流の機会を計画、実施する。 	A	<p>取り組んできたこと 大学、短期大学の学部・学科との連携によって、前年度に引き続き、学生が幼稚園行事準備や実施の手伝いをしたり、幼児に関わったりする機会をもった。さらに、今年度は、大学教育学部の音楽プロジェクトとして、学生がハンドベルの演奏を企画し、園児に披露する機会を持つことができた。また、保護者の学びの機会として、短大栄養学科の先生を講師に招き、「食育」をテーマにした講演会が実現した。連携は幼児だけに留まらず、保護者へと広がり、定着しつつあることは今年度の成果であると考えている。次年度以降も学生・大学及び短大教員と幼稚園が連携し、交流できる場を積極的に計画していきたい。</p> <p>取り組んできたこと 地域の東井高野小学校とは、2月に年長児が学校見学に行き、小学校への進学に期待を膨らませる機会となった。加えて、同小学校とは、大地震に伴う津波発生時の避難場所として連携をお願いしており、年長・年中児が避難訓練として小学校への避難を体験した。</p> <p>また、中学校のふれあい体験学習では、幼児と中学生が直接関わり合う機会をもつことができた。中学生は幼児について理解を深め、幼児にとっては大きいお兄さん、お姉さんと一緒に遊ぶ楽しさを味わう場になった。</p>

		<p>今後の課題 同じ地域の中で、子供を育てる学校機関としての交流は次第に定着化している。今後、内容について園と小・中学校とで実施後の話し合いを持つなど、さらに連携が意味あるものとなるような教員交流が課題ではないかと、考えている。</p> <p>取り組んできたこと 東淀川消防署、東淀川警察署、東淀川子育て支援センター等、地域の機関と連携して、幼児の安全教育や幼児と保護者を含めた子育て支援を行った。そのことにより、園の安全対策を確認するとともに、改善点を見出すことができ、強化することができた。また、子育て支援センターとの連携を通して、幼児の育ちをより深く読み取り、個々に応じた援助について考え、保護者との課題の共有も進めることに繋がった。</p> <p>今後の課題 これらの連携も定着しており、園の教育活動の一つとして位置づけている。訓練として終わるのではなく、日常の園生活の中に自然な形で取り込んでいくことが今後の課題としてあげられる。</p>
--	--	--

5. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

<p>保育の質・教員の保育力の向上が、本年度の大きな目標である。具体的には写真やビデオを活用し、実践を通して保育について協議を深めると同時に、実践を提示する教員は自らの保育実践を客観的に分析し、自身の課題を明確にして、どのように改善するかを考え、工夫する意欲が高まることを目標として取り組みを進めてきた。それぞれの教員が自身の保育について説明し語る経験は、改めて幼児教育について深く考える機会となり、目標としている保育の質や保育力の向上に繋がる一歩になったと考える。</p> <p>また、幼児教育は家庭との連携が不可欠であり、教育内容や幼児の成長の様子、安全・衛生に関する事などを具体的に伝え共通理解していくことも大切である。様々な機会を捉え、保護者に積極的に伝えていく取り組みを進めていく必要が今後の課題である。</p> <p>教員の仕事は多種多様で時間的な制約の中、スムーズに効率よく、しかし、じっくりと目標に向かって努力してきた。時間をフルに使いながらも、無理のない、実践可能な計画のもと、教職員が園運営や教育活動に努めてきた。今後も、実践を大切にしたい。研鑽を重ね、質の向上を視点に保育を見つめ直し、幼児期にふさわしい幼稚園教育を目指していきたい。</p>
--

6. 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み方法
保育の「質」を高める実践	学びの過程に着目し、時間をかけて幼児が自ら課題に取り組み、試行錯誤しながら課題解決に向かっていく道りを大切にして保育実践を見つめ直していく。その方法として、幼児の生活する姿を様々な方法で記録し、記録をもとに協議を深め、新たな課題を見出していく。
教員の保育力向上	保育の主体は幼児であることを踏まえ、個々の幼児の育ちを読み取りながら、一人一人にあった教師の関わりと必要な援助を常に考える。また、教師が互いの保育を見合い、良さや課題等を気兼ねなく伝え合いながら、より良い保育を創り出していこうとする雰囲気を高めていく。
学内連携の推進	短期大学幼児教育学科及び大学教育学部との連携をさらに深めながら、学生の学びの場を提供すると共に、幼児・保護者・教員にとっても様々な出会いや体験の場となる連携・交流の機会を積極的に計画、実施する。

7. 学校関係者の評価

評価委員・幼稚園教員（園長・教頭・教務担当・研究担当）出席のもと、各学期ごとに学校関係者評価委員会を行った。委員会では「教育活動について」「教員研修について」「学園や諸機関との連携」等を柱に、幼稚園から幼児や保護者の様子、教職員の取り組みの経過と成果及び課題を報告した後、評価委員より意見や助言をいただくなど、評議の場を設けた。

今年度の総合的評価としては概ね良好であり、今後一層の保育内容の充実を期待する旨の意見を得た。主として以下の内容が挙げられた。

1. 教育活動について

建学の精神にかなった、幼児教育の基本を忘れない姿勢は評価できる。幼児の実態を把握し、保育の課題を踏まえて今後も取り組んでいくことを期待する。

2. 教員研修について

今後も様々な研修等に積極的に参加することで、質の高い保育の実現を目指して欲しい。保育を見直し改善点を明らかにしていくことで、より取り組みを深めていって欲しい。

3. 学園や諸機関との連携について

附属幼稚園ならではの学園内連携を親密にしていくことが、地域に信頼される園づくりになっていくと考える。これからも学園・地域が連携し、視野を広げて、子どもを守っていくことを続けていって欲しい。